

ジュニアオリンピック陸上大会 RESULTS

(10/31~11/2 横浜日産スタジアム)

<Bクラス男子の部>

110mYH	堀本 薫	予選3組	15:81 (+0.3)	3着
		準決勝2組	15:69 (+0.3)	5着

- 第45回ジュニアオリンピック陸上競技大会。2020年東京オリンピック開催に向けて取り壊しが始まった国立競技場。その国立競技場開催のときから毎年出場選手を連れてこられることに、今年も感謝の気持ちでいっぱいになる。第30回大会1999年に横浜国



- 際総合競技場（現日産スタジアム）に開催が移った当時は、最新のハイテク設備を備えた巨大スタジアムに感動したものです。大げさに言えば、スタジアムの壁のしみやタータントラックの香りさえも、ひとつひとつの思い出が刻まれているようで、親しみを感じてしまうくらい愛着のある競技場となってしまったようです。
- 30日（木）の朝6時過ぎに競技場に到着。大阪ベンチの荷物の運びこみや場所取りのために、徹夜での車移動となった。時折、眠気が襲うこともあるが、大きな大会を迎える高揚感が勝り、いつもどおりの動きができてしまうのだ。12時過ぎに大阪選手団が到着。堀本と久しぶりに会ったような気がしたのが不思議であった。堀本は口数が決して多いタイプではない。感情を表に出すこともあまりない選手である。それでもこの巨大スタジアムに目を丸くしたようで、全国大会に来たという実感が湧き上がってきたはずだ。1時から自分は大阪選抜女子リレーチームの調整練習を見る必要があったので、堀本は大阪ベンチで待機。2時30分過ぎからウォーミングアップ場へ移動して、堀本の調整練習につきあった。堀本は5日前の第5回記録会で15秒01の素晴らしい記録で走っている。（夏の全中の参加標準記録は15秒00）ジュニアオリンピックのエントリー時点での15秒21は出場選手中、ランキング3位とプログラムに記載されている。他の選手のエントリー後の動向はわかっていないが、記録的には表彰台が狙える位置にあることは間違いない。勝負はアプローチ（スタートしてから1台目までの入りの技術）であることはわかっていた。正直、堀本のアプローチの技術はまだ完成されていない。8歩の刻みに当たり外れがあるのだ。ただ、大事な大会前にアプローチの技術を変えてしまうと混乱してしまうことが多い。その上に、冬季練習を終えて堀本のスプリ

ント力が上がった春先のシーズン移行期にその技術を完成させた方がいいと判断した。スタートでたとえ出遅れたとしても、1台目のハードルの板を通過するスピードがあればそれで十分だと考えていたのだ。この日の堀本はやや固さが見られたものの、いつもの早い刻みができていたと判断し、1時間程度で練習を切り上げた。

- 大会初日。好天に恵まれた。堀本が出場するBクラス110mYHはこの大会の最初の種目で9時30分競技開始となっていた。堀本は5時に起床。ホテル近くのコンビニで昼食の買い出しをさせて、6時30分から朝食。7時過ぎにホテルを出て、7時30分頃にウォーミングアップ場に到着した。表情ひとつ変えずアップを始める堀本。それでも全国大会特有の雰囲気によって圧倒されていたのかも知れない。選手招集所に送り出すときも、いくつかのアドバイスを送りながらも、リラックスさせることを最優先した。

3組7レーンに堀本が登場する。2組が終わってから、役員の指示でピッチに出てきた堀本の動きを見守った。公式のアプローチ練習も大きな難点もなくこなしていた。彼のスタートを見守った。ピストルが鳴って8人の選手がいっせいにスタート。堀本はまずまずのスタート。1台目のハードルを越えて、やや詰まって入ったためかリード足の着地の際にブレーキ動作が入ってしまったように見えた。そのためになかなか中盤に入っても伸びきらない。さすがに後半はいつもの伸びやかなハードリングを見せて。2着とわずかに100分の1秒差の3着でフィニッシュ。記録は15秒81。この予選は全部で6組あり、各組3着プラス6が準決勝進出となるので、この時点で早くも準決勝進出を決めた。



- やがて堀本が大阪ベンチに帰って来た。自分でも納得のいかないレースとなったが、とりあえず準決勝進出を果たしてホッとした様子であった。アプローチはやはり詰まったそうだった。ただ、この大舞台でひとつのレースを無事に終えたことの意味は大きいはずだ。何とか修正して準決勝のレースを迎えさせたいと考えた。課題はやはりアプローチである。そのためには平常心でのぞめるかどうか、その1点に尽きるのではないかと。早い目にウォーミングアップ場に移動して、彼のアプローチ練習を見守った。動きがやや重く感じる場面もあったが、なるべく普段と同じように気分のいい状態で選手招集所に送り出すように心がけた。「今までの自分のベストなレースはいつだった？ 記録的には15秒01を出した6日前の第5回記



録会やと思うけど……。もちろん、この大会の参加標準記録を突破した9月のジュニアオリンピック挑戦記録会のレースもそうやと思う」堀本が静かに頷いた後、きっぱりと言った。「それと、夏の選手権の準決勝のレースです」自分のイメージとドンピシャ同じであった。「そう、競り合っても自分の走りを徹し切ったあのときのレースのイメージで走ればいいんだよ」と続けると、堀本は深く頷いた。さらに、「どんなに強い選手でも、細心の注意を払って準決勝のレースにのぞむもの。緊張感があるのは当たり前。その緊張感を集中力に変えることができるはずだ。失敗を怖れずにいつもどおり積極果敢なレースをしよう！」と、声をかけて薄暗い選手招集所に送り出した。

- ジュニアオリンピックファンファーレが高らかに鳴り響いた。これまでに何度も夢に向かって祈るような思いでこの音楽を聴いている。パブロフの犬のように、条件反射で目頭が熱くなる自分が今年もいるのだ!? 堀本は2組8レーン。アナウンサーのレーン紹介が始まる。選手の目の前にはカメラをかついだ人と、そのコードを巻きながら持つ人の2人のクルーがいる。その映像がスタジアムの第1曲走路の上面にある大型映像に映し出される仕組みになっている。「第8レーン。堀本薫くん。大阪東雲！」緊張した面持ちの堀本の表情が大型映像に映し出される。レーン紹介が終わって、スターターの合図を待つあいだ、堀本はジャンプを繰り返しながら集中を高めている。「ON YOUR MARKS」のスターターの声で、それぞれの選手がそれぞれのルーティンを施しながらクラウチングスタートの姿勢を取る。その様子を目の前に広がるトラックと、大型映像のスクリーンを交互に見つめながら確かめる。「SET」一瞬の静寂の後、スターターのピストルが鳴った。1台目のアプローチ。堀本が出遅れていたのはすぐにわかった。最後尾でなかったか。そこからハードルを越えるたびにスピードを上げることができればいいのだ。それには自分のレーンに集中して自分のハードリングとインターバルの刻みを徹し切るしかない。堀本のスピードが上がった。ひとり抜き、ふたり抜き……。準決勝は3組2着プラス2。2着に入れば決勝進出確定。他の組の兼ね合いもあるが、4着までに入れば、数字上は決勝進出の可能性が残ることになる。フィニッシュラインを堀本が駆け抜けた。5着であることがスタンドから見てもすぐにわかった。堀本の準決勝敗退が決まった。記録は15秒69。自己記録に遠く及ばないタイムであった。



- 堀本が無言で大阪ベンチに帰って来た。2人ですぐにミーティングをして、レースの振り返りをした。後にネットの動画配信を見て詳しく確認できたことだが、アプローチがいつものリズムではなかった。いつも以上に頭を低くして飛び出したために、踏み切る直前の1歩手前のストライドが広がってしまっていたのだ。ちょうど、走り幅跳びの踏

み切りで、踏み切る手前でストライドを広げて間延びしてしまう失敗跳躍と同じ理屈である。「今まで経験したことのない重圧でした」と、彼が小声で正直に振り返る。確かに、自分の力を十分に出し切れないうままま終わってしまった。それでも、彼はよく戦った。ベストを尽くしたことに間違いはない。彼の健闘を讃えたのだが、その後彼は大阪ベンチのシートに首をうなだれて座ったまま長いあいだ動かなかった。悔しくて仕方ないことはすぐに察することができた。今は悔しさを噛みしめることが、彼にとって大事なことであると判断して、こちらから何も言わずに遠くで静かに見守った。

- 3泊4日の横浜の旅は堀本薫の大冒険であったに違いない。どちらかと言うと、人見知りすることが多く、新しい環境に慣れるのに時間がかかる選手である。人付き合いにおいて、決して要領のいいタイプでもない。逆に、まわりの雰囲気左右されることがなく言われたことを一生懸命にできる真面目な性格である。だからこそ、中学2年生として日本でトップレベルのハードリングの技術を身につけることができたはずだ。そんな彼だから、はじめの方は静かにひとりであることが多かった。ところが日が経つにつれて、大阪の他校の選手と仲がよくなっていったのだ。最終日には集団応援にも加わり、大きな声で声援を送っていた。ホテルでもシングルでひとりで泊まり淋しい思いをした時間帯もあったはずだ。それでも、2日目、3日目は自分ひとりで起きて、バイキングの朝食を摂り、フロントにキーをあずけて競技場に移動している。自立した行動が日々とれるようになった。「今の（大阪の）選手団と仲良くなりや。冬の近畿選抜合宿でも、春の大阪中体連合宿でもいっしょになる仲間になるよ。もちろん、北海道全中でも遠征をともにすることになるのだから…」と、彼に言い聞かしていたのだ。今回のジュニアオリンピックは、堀本薫物語のプレリュード（序章）。夢輝く日に向けて、今物語が始まったところなのです。今回の経験を生かして、必ずや来年の北海道全中では大活躍してくれることでしょう。さらに1年後、この横浜で綴るストーリーにも注目したい。

